



The Japanese Association
of Organic Geochemists

Newsletter

Organic Geochemistry 76

Oct. 7, 2022

目次

Invitation 2

第 39 回有機地球化学シンポジウム ファーストサーキュラー

世話人一同

Report 3

2022 年度有機地球化学会賞（学術賞）受賞者決まる

2022 年度有機地球化学会研究奨励賞（田口賞）受賞者決まる

Information 10

日本有機地球化学会 2022 年度 年会費のお支払いについて

日本有機地球化学会 2022 年度 定時総会議事録

Announcement 14

ROG38 巻へ論文を投稿しましょう！！

編集後記 16

Invitation

第 39 回有機地球化学シンポジウム ファーストサーキュラー

第 39 回有機地球化学シンポジウム（2022 年 横須賀シンポジウム）は、理事会での決定に基づいて、来る 2022 年 12 月 15 日～16 日の日程でオンライン開催いたします。

皆様の研究成果の発表、また、建設的な議論の場として、多くのご参加をお待ちしております。

第 39 回 有機地球化学シンポジウム

2022 年 12 月 15 日（木）～16 日（金）

開催内容：口頭発表・受賞講演

開催形式：Zoom（オンライン）

開催までのスケジュール：

- | | |
|--------------|---------|
| 11 月 2 日（水） | 発表申込み〆切 |
| 11 月中旬 | プログラム公開 |
| 11 月 22 日（火） | 要旨提出〆切 |



参加費：

本会の会員は、発表者・参加者ともに、無料とします。

発表申込みと要旨提出の詳細は、学会ホームページや会員メーリングリストにて、お知らせいたします。

世話人

高野 淑識・伊左治 雄太・浦井 暖史・古賀 俊貴

Report

2022 年度有機地球化学会賞（学術賞）受賞者決まる

有機地球化学賞（学術賞）第 19 号

受賞者：吉岡 秀佳 会員（産業技術総合研究所・地圏資源環境研究部門・研究グループ長）

受賞題目：「地下圏微生物によるメタン生成ポテンシャル、メカニズム、および根源有機物に関する研究」

受賞理由：

吉岡秀佳会員は地下圏微生物によるメタン生成ポテンシャル、メカニズム、および根源有機物に関して、有機・生物地球化学的研究を展開してきた。微生物学の研究者と共同研究体制を構築するとともに、新たな研究手法の開発にも取り組むことにより、以下の様な顕著な研究成果を創出している。

(1) メタンハイドレートが分布する海洋地下圏におけるメタン生成活性

カナダ・バンクバー島沖合カスカディア縁辺域および東部南海トラフにおいて ^{14}C -トレーサー法や *mcrA* 遺伝子（メタン生成菌の機能遺伝子）の PCR 増幅度を使って、メタン生成活性の深度変化や生成経路を評価した。その結果、両地域ともにメタンハイドレート の分布深度内でメタン生成活性が高いこと、 CO_2 還元が主要なメタン生成経路であることを明らかにした。また、東部南海トラフでは、従来見過ごされていたメタノールからのメタン生成活性が CO_2 還元経路に次いで高いことを明らかにした。さらに、堆積物から分離したメタン生成菌の培養実験から、菌が得られた原位置の温度帯（4～15℃）でのメタン生成能力を確認すると共に 45℃以上でメタン生成速度の急激な減少を認めた。これらの海底下におけるメタン生成活性の情報は、堆積物中でのメタンの生成深度・生成量の見積もりに必須であり、今後のメタンハイドレートや微生物起源ガス鉱床の探鉱・開発への貢献が期待される。

(2) 水溶性ガス田が分布する陸域地下圏におけるメタン生成活性

水溶性ガス田のかん水中に含まれるメタン生成菌の培養、遺伝子解析による系統分布の調査、 ^{14}C -トレーサー法によるメタン生成活性の経路別評価を行い、多様なメタン生成菌の存在と、 CO_2 還元が主要なメタン生成経路であることを示した。また、コア堆積物とかん水を混合して原位置温度・嫌気条件で長期間培養すると、堆積物中の全有機炭素量の 5～18%に相当するメタンが生成されることを示した。これは難分解の高分子有機物であるケロジェンを原位置微生物が分解（資化）できることを初めて実証した研究である。

(3) 微生物起源メタンと間隙水の水素同位体分別

メタンの水素同位体組成と共存する間隙水の水素同位体組成の関係は、微生物起源のメタンの生成経路を判別する指標として広く利用されている。しかしながら、メタン生成菌を単独培養する従来の研究では、地下圏のメタンと水の水素同位体分別を再現できないという問題があった。吉岡会員はバクテリアとメタン生成菌の共生系を低水素分圧下で培養することによって、陸域地下圏（泥炭地、帯水層など）における水素同位体分別を再現することに成功した。

(4) 嫌氣的メタン酸化古細菌によるメタン生成

東部南海トラフおよび関東平野沖積層堆積物において、嫌氣的メタン酸化古細菌 (ANME) が優占する微生物組成を報告するとともに、沖積層堆積物中の脂質バイオマーカーと間隙水の溶存 CO_2 の間で炭素同位体組成を比較することにより、ANME-1 が周囲の環境に応じてメタン生成も行っている可能性を示した。

(5) 根源有機物の化学構造

独自に改良した四酸化ルテニウム酸化法でタイプ II ケロジェンを分解し、生成したベンゼンカルボン酸組成から、ケロジェンの芳香族構造の特徴を推定した。また、赤外線レーザーを用いた部分熱分解蒸発法による頁岩や石炭の局所バイオマーカー分析法を開発した。本装置では、局所分析の精度を高めることにより、石炭マセラルごとの熱分解生成物のバイオマーカー分析を可能にした。これらの研究は微生物起源、熱分解起源に関わらず、根源有機物からの炭化水素生成メカニズムの理解に貢献するものである。

これらの成果は、各分野の国際学術誌を中心に査読付き論文（総説を含む）35 編、査読なし論文等 7 編として公表されている。

以上のとおり、吉岡秀佳は、微生物からケロジェンまで、有機地球化学および環境微生物学との融合領域で優れた研究業績を有し、わが国の有機地球化学の分野で顕著な学術業績をあげた者と認められ、有機地球化学賞（学術賞）を受賞するに相応しいと判断された。

（有機地球化学賞（学術賞）選考委員会）



有機地球化学賞（学術賞）第20号

受賞者：関 幸 会員（北海道大学・低温科学研究所・准教授）

受賞題目：「堆積物中のバイオマーカー分析による古気候解析に関する研究」

受賞理由：

関会員は有機地球化学的手法を駆使して、過去の気候変動の復元に関する研究を展開してきた。特に、最新の有機地球化学的手法を様々な古気候アーカイブにいち早く導入することで、古気候学における重要な課題を解明し、有機地球化学的手法の有効性を示すことで古気候解析における新たな研究の発展に貢献してきた。

（1）水温および気温の復元

関会員は、カリフォルニア沖の堆積物コアにアルケノン古水温法を適用し、最終氷期に発生していた突然かつ急激な気温変動（ダンスガードサイクル）に伴う表層水温の変動を解析した。過去8万年間の詳細な水温変動を復元した結果、氷期サイクルの変動幅にも匹敵する4°Cもの大きな水温変動を明らかにした。絶対温度での復元が可能なアルケノン古水温計の有効性を示したこの研究は、*Echoes of Life*に、古海洋研究におけるアルケノン古水温法適用の好例として紹介されるなど高い評価を得た。さらに、関会員は、北太平洋縁辺海における氷期の高水温問題の解明にいち早く取り組んだ。日本海やオホーツク海の堆積物のアルケノン古水温記録では、氷期において異常な高水温を示しており、アルケノン古水温法には何らかのバイアスが存在する可能性が指摘されていた。関会員はオホーツク海堆積物コアに新規水温プロキシであるGlycerol Dialkyl Glycerol Tetraether (GDGT) 古水温法を適用し、過去15万年間の表層水温変動を復元した。その結果、縁辺海でも氷期の水温は間氷期に比べて著しく低かったことを明らかにした。同会員は、北太平洋高緯度域から採取された表層堆積物のGDGTを分析し、北太平洋高緯度域に最適化した水温換算式を確立した。これらの成果は、他の古水温法が適切に機能しないケースが多い北太平洋高緯度海域における古水温復元の新たな方法を提供するものであり、その後の北太平洋高緯度の古海洋研究の発展に大きく寄与した。さらに近年はベーリング海堆積物中の長鎖アルカンの組成から周辺陸域の気温変動を復元できることを示すなど、有機地球化学的手法を用いた高緯度陸域の古気候復元にも新たな展開をおこなった。さらに関会員は研究対象を中新世や鮮新世にまで拡大し、熱帯の気候に関する重要課題にも取り組んだ。熱帯気候研究においては熱帯の平均的な気候モード（ラニーニャvsエルニーニョ）と全球的な気候変動との関連の理解が重要な課題である。関会員はアルケノン、GDGT古水温法に加えて、栄養塩レベルの新規プロキシであるジオール指標など最新の有機地球化学的手法を導入し、過去1000万年間にわたる熱帯東太平洋の表層温度構造の変動を詳細に復元した。その結果、東熱帯太平洋の表層温度構造の長期的な変動は、過去1000万年間において一貫して全球的な気候変動と同調しており、両者が強く関連していることを明らかにした。

（2）降水量復元

関会員は、気候変動に対するアジアモンスーン降水の応答は中国各地で一様なのか、それとも地域によって大きく異なるのかが論争となっていたアジアモンスーンに関する古気候研究において、水循環の新規プロキシである植物ワックス（n-アルカン）の水素同位体比を測

定し、中国泥炭コアから過去1.3万年間の相対湿度の変動を復元した。その結果、気候変動に対するアジアモンスーンの応答は地域によって大きく異なることを明らかにし、中国におけるモンスーン論争に一石を投じた。また、現在は分子レベル水素同位体比を過去の南極氷床の変動の復元に応用するなど、新たな展開に繋がっている。

（3）CO₂濃度復元

関会員は、現在よりも全球平均気温が3℃程度高いとされ、近未来の温暖地球の類型として注目されている鮮新世温暖期の原因解明にも取り組んだ。関会員はアルケノン安定炭素同位体比に基づくCO₂復元手法を高精度化し、別の独立した復元手法も導入することで、より信頼性の高いCO₂濃度の推定を実現させた。その結果、鮮新世の大気CO₂濃度は350 ppm以上と推定され、高いCO₂濃度が当時の温暖な気候の主因であることを示した。高い信頼性で鮮新世のCO₂濃度を推定したこの論文は数多く引用され（被引用数471回、Google Scholar）、Web of Science の被引用数トップ1%論文となっており、その後の鮮新世の研究に多大な影響を与えたことは特筆に値する。

上記の顕著な成果を含め、関幸会員がこれまで公表した査読付き原著論文は66編、および査読なし論文等（総説等）は6編である。

以上、関会員によるバイオマーカーを用いた古気候研究に関する業績は、有機地球化学の普及と発展に大きく貢献しており、関幸会員はわが国の有機地球化学の分野で顕著な学術業績をあげた者と認められ、有機地球化学賞（学術賞）を受賞するに相応しいと判断された。

（有機地球化学賞（学術賞）選考委員会）



2022 年度有機地球化学会研究奨励賞（田口賞）受賞者決まる

研究奨励賞（田口賞）第 27 号

受賞者：安藤 卓人 会員（島根大学・特任助教）

受賞題目：「藻類分子化石による古環境変動および水圏生態系応答に関する研究」

受賞理由：

安藤卓人会員は、有機地球化学調査による古海洋環境および海洋生態系変動の復元と、海洋無酸素化の生物地球化学的メカニズムの解明を目的として、研究を行っている。具体的には、南フランスや北海道中部の白亜系 OA 層準の黒色頁岩・泥灰岩に含まれる藻類由来バイオマーカーとケロジェンを用いて、当時の海洋基礎生産と海洋深層水における無酸素水塊の拡大メカニズムを解明し、無酸素環境下での海洋表層における生態系を復元した。特に、熟成の進んだ堆積岩でみられる多種の芳香族ステロイドを用いた海洋基礎生産者の群集解析法を開発・検討した点に有用性と独創性があり、国際的に高く評価されている。また、中極性キャピラリーカラムを用いた芳香族ステロイド異性体の分離に取り組み、ステロイドからの起源種同定の精度向上を実現させた。安藤会員が提案した三芳香環ジノステロイド指標（Triaromatic dinosteroid index; TADS）を用いた研究では、白亜紀 OAE1b 時に海洋生態系において渦鞭毛藻が顕著に優勢となり有機物生産・埋積に大きく貢献したことを提示した。これらの成果を *Organic Geochemistry*、*Palaeo3* などの国際誌に公表している（Ando et al., 2017; 2022）。

学位取得後は北海道大学北極域研究センターに博士研究員として移り、氷床コア中の有機物粒子から環境動態解析を行う研究プロジェクトに関わる顕微ラマン・顕微赤外分光技術の改良・開発とその環境動態評価や古環境解析への応用に挑戦した。その後、特任助教として着任した島根大学・エスチュアリー研究センターでは、藻類の基礎生産過程や環境変化に対する応答や、藻類が形成する抵抗性高分子の生物学的過程などを解明する研究において、これまでの経験を生かしながら新しい研究分野を展開している。野外調査の経験も多く、統合深海掘削計画 IODP Exp. 353 航海で採取した白亜紀末期～新第三紀のインド洋アンダマン海堆積物中のステロイド・長鎖アルケノン分析から海洋基礎生産および海洋環境の変動を復元したほか、グリーンランド北西部 Qaanaaq における実地調査に加えて採取した先カンブリア時代の堆積岩を用いた共同研究も進めている。これまでに、国際誌に 11 編（うち筆頭論文は 3 編）、国内誌に 5 編（うち筆頭論文は 2 編）の査読付き論文を公表している。また、JpGU-AGU Joint Meeting 2022 で招待講演を行っている。国際シンポジウム等では海外の研究者と積極的に交流し、国際的な舞台で活躍することが期待される。以上から、安藤会員は、地質年代スケールの海洋基礎生産とそれに関わる生物地球化学過程の解明や古海洋・古環境復元において信頼性の高い成果を挙げ続けており、今後の研究活動におけるブレークスルーが期待される若手研究者であり、研究奨励賞（田口賞）を受賞するに相応しいと判断される。

（研究奨励賞（田口賞）選考委員会）



研究奨励賞（田口賞）第 28 号

受賞者：宮嶋 佑典 会員（産業技術総合研究所・研究員）

受賞題目：「メタン冷湧水成の炭酸塩岩に着目した堆積学的・有機地球化学的研究」

受賞理由：

宮嶋佑典会員は、現世および地質時代の海底メタン冷湧水域における生命活動や物質循環を明らかにすることを目的とし、メタンの嫌氣的酸化に伴って形成される炭酸塩岩について堆積学・地球化学・古生物学的観点から総合的に研究を行い、過去に湧出したメタンや流体の起源を解明する研究へと発展させた。具体的には、長野県、新潟県、秋田県、北海道の石油・天然ガス胚胎地域に分布する新第三系～第四系に含まれる炭酸塩岩を対象とし、動物化石や岩石・鉱物学的特徴、炭素・酸素安定同位体比、脂質バイオマーカー組成などに基づき、それらが過去のメタン冷湧水によって形成されたものであることを明らかにした。これらのうち堆積学的、有機地球化学的な研究成果を *Journal of Sedimentary Research*、*Chemical Geology*、*Journal of Asian Earth Sciences* といった国際誌に公表している（Miyajima et al., 2018a; 2018b; 2020）。

宮嶋会員の多角的に研究を展開することができる姿勢は高く評価される。学位取得後は東京大学の鍵裕之教授らと共同で炭酸塩鉱物の微量元素分析や U-Pb 年代測定のための標準物質合成について論文を公表し（Miyajima et al., *Geostandards and Geoanalytical Research*, 2021）、メタン冷湧水炭酸塩岩への局所 Sr 同位体比分析の応用について JpGU で招待講演を行った。現在も、現世・地質時代のメタン冷湧水炭酸塩岩に微量に含まれる Sr、Nd、Li の同位体比分析に関する共同研究を継続している。また、学会や調査航海などを通じて国内外の様々な研究者とのネットワークを自発的に構築し、海外研究者を含む多様な研究者と共同研究を展開している。また、洋書”Ancient Hydrocarbon Seeps” (Springer)では脂質バイオマーカーに関する総説執筆の依頼を受けた（Miyajima & Jenkins, 2022）ことに加えて、JpGU のセッションコンビーナ代表を務めるなど、冷湧水関連研究分野におけるリーダーシップを発揮している。

これまでに、国際誌に 11 編（うち筆頭論文は 8 編）、国内誌に 1 編の査読付き論文を公表している。また、2020 年に AAPG で招待講演を行なっている。2017 年には第 35 回有機地球化学シンポジウムで学生優秀発表賞を、2015 年には京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地質学・鉱物学分野の 2014 年度修士論文賞を受賞している。以上から、宮嶋会員は、今後も有機地球化学、堆積学や関連分野での更なる活躍が期待される若手研究者であり、研究奨励賞（田口賞）の受賞に相応しいと判断される。

（研究奨励賞（田口賞）選考委員会）



研究奨励賞（田口賞）第 29 号

受賞者：高橋 幸士 会員（産業技術総合研究所・主任研究員）

受賞題目：「堆積岩有機物の熱熟成と天然ガスに関する研究」

受賞理由：

高橋幸士会員は、新生代石炭をはじめとした堆積岩の熱熟成や天然ガスの生成、排出、移動に関する研究を有機・同位体地球化学、石油・石炭地質学、堆積岩石学の観点から精力的に推進している。高橋会員は、石炭中で生成した炭化水素ガス（ $C_1 \sim C_3$ ）が有機質基質を移動して排出される際に、メタンは有意な炭素・水素同位体分別が生じること、一方、エタン・プロパンでは同位体分別がほぼ無視できることを初めて明らかにした。また、堆積岩の埋没続成作用では当初は開放系で物質変化が生じ、圧密の進行にともなって次第に閉鎖系へ移行する点に着目し、開放系と閉鎖系での石炭熱分解を行い、炭化水素ガスの炭素・水素同位体組成とビトリナイト反射率との関係が大きく異なることを初めて示した。そして、準開放系での熱熟成に伴う炭化水素ガスの炭素同位体組成の変化が自然界での埋没続成作用に伴う熱変化と最も近いことを示した。これらの研究成果を *International Journal of Coal Geology* 誌に公表している（Takahashi et al., 2014; 2017）。

学位取得後は、名古屋大学大学院環境学研究科の博士研究員として、迅速かつ簡便な大気水蒸気の濃度と水素・酸素同位体組成の測定法を開発し火山噴火様式の遠隔判別法に応用した（Takahashi et al., 2019）。その後、産業技術総合研究所地質調査総合センター地圏資源環境研究部門に研究員として採用され、北海道釧路堆積盆における新生代石炭の炭化水素生成能力や広域的な熟成度評価に関する研究に従事した（Takahashi et al., 2020）。そのほか、秋田県女川層相当層の堆積環境に関する研究や石油炭化水素の起源有機物評価のための新たな指標開発に関する共同研究を行った。現在は産業技術総合研究所地質調査総合センターの主任研究員として、研究活動の裾野を広げながら研究者としての実績と経験を着実に積み重ね、有機地球化学、石油・石炭地質学、堆積岩石学に足場を置いた研究活動を力強く推進している。

これまでに、国際誌に 8 編（うち筆頭論文は 4 編）、国内誌に 1 編（うち筆頭論文は 1 編）の査読付き論文を公表している。また、The 31st Annual Meeting of the Society for Organic Petrology での The Best Student Poster Award や日本科学協会笹川研究奨励賞など国内外の学協会から 4 件受賞していることは、高橋会員の研究が学術的、社会的に高く評価されていることの表れである。以上から、高橋会員は、将来の有機地球化学を牽引するのみならず、我が国の資源エネルギー開発や関連産業の発展にも貢献しえる有能な若手研究者であり、研究奨励賞（田口賞）を受賞するに相応しいと判断される。

（研究奨励賞（田口賞）選考委員会）



Information

一般社団法人 日本有機地球化学会 2022 年度年会費のお支払いにつきまして

平素より当学会の活動・運営にご理解、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

本会の会計年度は 7 月 1 日より翌年 6 月 30 日までとなっており、会員の皆様には、当該期間内に年会費（正会員：年額 3,000 円、学生会員：年額 1,000 円）のお支払いをお願いしております。まだ、お支払いいただいていない会員の皆様におかれましては、ぜひお早めのお支払いをお願いいたします。

年会費のお支払いには、シクミネットによるオンライン決済システム（<https://m6.members-support.jp/ogeochem/>）

（メニュー → お支払い → 会費支払い）をご利用ください。コンビニ、ペイジー、クレジットカードによるお支払いが可能です。

なお、2021 年度以前の年会費の未払い分については、シクミネットによる納付ができません。該当する会員様には、個別メールにてご案内いたしますので、ご対応をお願いいたします。

シクミネット上の会員 ID 及び初期パスワード、会費納入済み年度など、ご不明な点がございましたら、事務局（office@ogeochem.jp）までお問い合わせください。

皆様のご理解とご協力をお願いいたします。



一般社団法人 日本有機地球化学会 2022 年度 定時総会議事録

2022年8月22日（月）13：30～16：00

オンライン会議（ホスト設置場所：北海道大学低温科学研究所）

出席者：18名参加（開始時）、委任状24名 計42名

（正会員と名誉会員の総数117名の1/5以上の参加により、総会成立）

議題

第1号議案 2021 年度事業報告

- ・第38回有機地球化学シンポジウム（北大・低温研、ハイブリッド、11月29-30日）
- ・定時総会の開催（2021年8月17日、オンライン）
- ・理事会の開催（2021年7月、2022年4月、オンライン）
- ・学術賞受賞候補者選考委員会
- ・田口賞受賞候補者選考委員会
- ・ROG編集委員会
- ・記念事業・マニュアル編集委員会
- ・共催：日本地質学会第128年学術大会（ハイブリッド開催）
- ・ニュースレター No. 74、No. 75
- ・ROG Vol. 36/37（2021年12月発行）

以上、いずれも出席者多数により承認された。

第2号議案 2021 年度会計報告（貸借対照表及び損益計算書）

2021年度一般会計		2021年度予算	2021年度修正予算	2021年度決算	備考
収入	賛助会費	¥ 160,000	¥ 160,000	¥ 140,000	出光興産さま、新規ご入会
	個人会費（2021年度分）	¥ 347,000	¥ 347,000	¥ 277,000	正会員90名、学生会員7名
	個人会費（2020年度以前）	¥ 130,000	¥ 130,000	¥ 76,000	
	利子	¥ -	¥ -	¥ 20	
	計	¥ 637,000	¥ 637,000	¥ 493,020	
負債扱い	個人会費（2022年度以降先払い分）	¥ -	¥ -	¥ 3,000	
支出	ROG印刷費	¥ 350,000	¥ 350,000	¥ 624,591	送料含む
	ROG送料	¥ 30,000	¥ 30,000	¥ -	
	HP維持費	¥ 29,370	¥ 28,000	¥ 28,930	
	事務局経費・雑費	¥ 24,000	¥ 24,000	¥ 24,427	振込手数料・切手代等含む
	シクミネット使用料	¥ 205,656	¥ 205,656	¥ 200,376	予算ー決算差額は振込手数料分
	学会年会費	¥ 10,220	¥ 10,220	¥ 10,000	予算ー決算差額は振込手数料分
	法人道民税	¥ 15,000	¥ 35,000	¥ 35,000	
	法人市民税	¥ -	¥ 87,500	¥ 87,500	
	計	¥ 664,246	¥ 770,376	¥ 1,010,824	
	2021年度収支（収入総計ー支出）	¥ -27,246	¥ -133,376	¥ -517,804	
	当初資金	¥2,537,577	¥2,537,577	¥ 2,537,577	
	次年度繰越金額	¥2,510,331	¥2,404,201	¥ 2,019,773	
	次年度繰越金額+2022年度会費既納	¥2,510,331	¥2,404,201	¥ 2,022,773	
2021年度田口基金		2021年度予算	2021年度修正予算	2021年度決算	
収入	利子	¥ -	¥ -	¥ 186	
	計	¥ -	¥ -	¥ 186	
	総計	¥ -	¥ -	¥ 186	
支出	副賞	¥ 50,000	¥ 100,000	¥ 100,000	受賞者2名
	関連経費	¥ -	¥ -	¥ -	副賞発送料等は事務局経費から捻出
	源泉徴収	¥ 1,531	¥ 4,734	¥ 4,734	源泉徴収3名分
	計	¥ 51,531	¥ 104,734	¥ 104,734	
前年度繰越金		¥1,246,923	¥1,246,923	¥1,246,923	
総計		¥ 1,195,392	¥ 1,142,189	¥ 1,142,375	

法人の年度が7月～6月であることに起因する手違いにより、2020年度の道民税、市民税の納税が正しく行われておらず、2021年の道民税、市民税に、2020年度の未納期間分の税金を支払ったこと、2021年度のROGの印刷費が投稿数の増加、印刷費の高騰などの影響で、例年の約2倍になったことなどが報告され、出席者多数により承認された。

第3号議案 2022年度事業計画

- ・第39回有機地球化学シンポジウム（オンライン、2022年12月）
- ・定時総会の開催（2022年8月22日、オンライン）
- ・理事会の開催（2022年7月、2023年4月、オンライン）
- ・学術賞受賞候補者選考委員会
- ・田口賞受賞候補者選考委員会
- ・ROG編集委員会、記念事業・マニュアル編集委員会、将来計画委員会
- ・共催：日本地質学会第129年学術大会（ハイブリッド開催）
- ・ニュースレター No. 76、No. 77 予定
- ・ROG Vol. 38（2022年12月発行）
- ・財政安定化WG（事務局＋理事の数名）

以上、いずれも出席者多数により承認された。

第4号議案 2022年度会計計画

2022年度一般会計		2022年度予算	2021年度実績	増減
収入	賛助会費	¥ 160,000	¥ 140,000	20,000
	個人会費（当該年度分）	¥ 339,000	¥ 277,000	62,000
	個人会費（当該年度以前未納分）	¥ 102,000	¥ 76,000	26,000
	シンポジウム協賛金・剰余金	¥ -	¥ -	0
	シンポジウム参加費	¥ -	¥ -	0
	利子	¥ 20	¥ 20	0
	計	¥ 601,020	¥ 493,020	108,000
支出	ROG費用（送料含む）	¥ 400,000	¥ 624,591	▲ 224,591
	HP維持費	¥ 28,930	¥ 28,930	0
	シンポジウム費用	¥ -	¥ -	0
	事務局経費・雑費	¥ 24,000	¥ 24,427	▲ 427
	シクミネット使用料	¥ 200,376	¥ 200,376	0
	学会年会費	¥ 10,000	¥ 10,000	0
	法人道民税	¥ 20,000	¥ 35,000	▲ 15,000
	法人市民税	¥ 50,000	¥ 87,500	▲ 37,500
	計	¥ 733,306	¥ 1,010,824	▲ 277,518
収支総計		¥ -132,286	¥ -517,804	
前年度からの繰り越し		¥ 2,019,773	¥ 2,537,577	
年度末資産予測		¥ 1,887,487	¥ 2,019,773	
2022年度田口基金		2022年度予算	2021年度実績	増減
収入	利子		¥ 186	▲ 186
	総計	¥ -	¥ 186	▲ 186
支出	副賞	¥ 50,000	¥ 100,000	▲ 50,000
	関連経費	¥ -	¥ -	0
	源泉徴収	¥ 1,531	¥ 4,734	▲ 3,203
	計	¥ 51,531	¥ 104,734	▲ 53,203
収支総計		¥ -51,531	¥ -104,548	53,017
前年度からの繰り越し		¥ 1,142,375	¥ 1,246,923	
総計		¥ 1,090,844	¥ 1,142,375	

2022 年度の ROG の印刷費は、印刷費の高騰などの影響を考慮し、400,000 円を計上することなどが報告され、出席者多数により承認された。

その他

1. 財政健全化

①2021 年度の決済が約 50 万円の赤字になっていること、②シクミネットのアップデートに伴い、年間使用料がこれまでの約 20 万円から、約 40 万円に上がることに、③コロナ禍で、今後のシンポジウムの実施方法が不透明であることにより、本会の収支バランスの再検討が迫られている。これに対して 2022 年 7 月の理事会で、シクミネットの利用停止、ROG の電子化を実施し、また、会員情報の管理方法・会費等の徴収の方法を、WG（事務局＋理事の数人）で検討することが報告された。

2. ROG の改革

ROG を電子化し冊子体印刷を廃止すること、J-stage Data の有効利用、投稿論文に Supplementary, Support Information を追加できるようにすることをについて、編集委員会で検討することが報告された。

3. 有機地球化学賞（学術賞）

吉岡秀佳会員（産業技術総合研究所・地圏資源環境研究部門・研究グループ長）

「地下圏微生物によるメタン生成ポテンシャル、メカニズム、および根源有機物に関する研究」

関宰会員（北海道大学・低温科学研究所・准教授）

「堆積物中のバイオマーカー分析による古気候解析に関する研究」

4. 研究奨励賞（田口賞）

安藤卓人会員（島根大学・特任助教）

「藻類分子化石による古環境変動および水圏生態系応答に関する研究」

宮嶋佑典会員（産業技術総合研究所・研究員）

「メタン冷湧水成の炭酸塩岩に着目した堆積学的・有機地球化学的研究」

高橋幸士会員（産業技術総合研究所・主任研究員）

「堆積岩有機物の熱熟成と天然ガスに関する研究」

Announcement

**ROG が形式の変更、完全電子ジャーナルに変わります。
38 巻へ論文を投稿しましょう！**

Researches in Organic Geochemistry

編集委員長 沢田 健

Researches in Organic Geochemistry (ROG) は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する分野の研究論文を掲載し、WEB 公開および冊子を発行しております。NL 前号でもお知らせしたように、ROG では J-Stage における J-Stage Data (論文の補足資料や根拠となるデータ—研究成果や研究過程で得られた情報を WEB 公開するデータリポジトリシステム) を有効に活用して、皆様の研究成果における大容量データの公開や、ROG の図表を Supplementary information 化して本文を簡素化するなどを検討してきました。また、それに合わせて、ROG の冊子印刷を取りやめ、WEB 公開のみの完全電子化にすることが検討されています。完全電子化は、J-Stage Data による大容量データの論文の公開において都合がよいこと、印刷費を大幅に削減できる、冊子のバックナンバーの保管場所を必要としないなどのメリットがあり、他学会でもこの形式での学術雑誌発刊が増えています。ROG でも完全電子化を採用しようということです。この Supplementary Information 重視の形式変更と完全電子化により、ROG がよりスタイリッシュな形式・形態の学術雑誌になると思います。Supplementary Information 作成・公開方法についての詳細は以下のとおりです。

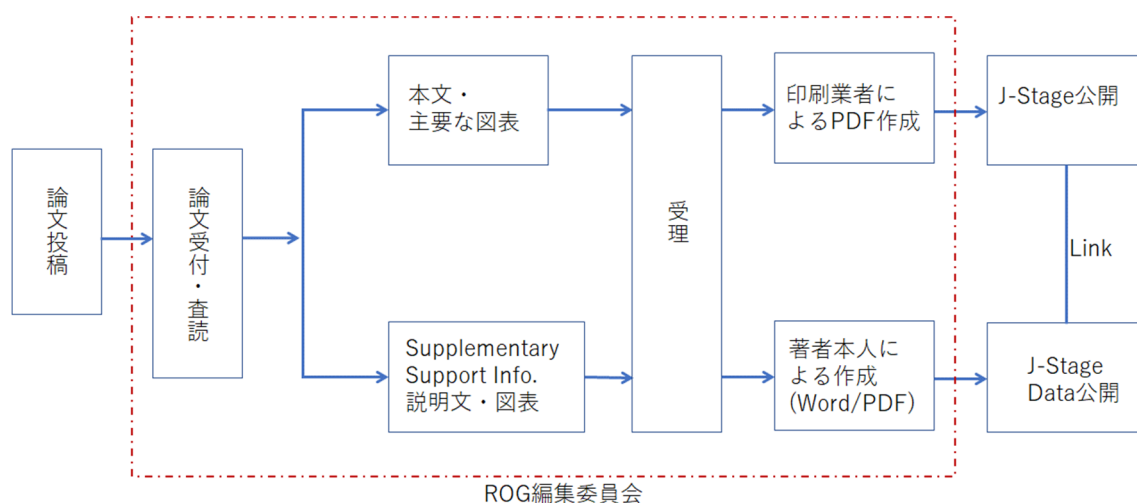
J-Stage Data の有効利用と Supplementary Information 作成/公開：

- ・ ROG の論文形式について、Supplementary Information (Suppl. Info. ; 補足資料) を追加する形式に変更します。それらの PDF ファイルは著者本人が作成し、編集委員会が査読・チェックします。受理後の完成段階では編集委員も作成の補助をします。
- ・ Suppl. Info. は J-Stage Data として WEB 公開されます。
- ・ Suppl. Info. の作成・公開のフローは以下の資料を参照してください。
- ・ Suppl. Info. 作成に関して、ROG の投稿規定改訂版をご参考になしてください。

※以下、投稿規定改訂版から一部抜粋

- ・ Supplementary Information (補足資料) は原稿とともに提出する。補足資料も審査される。補足資料は編集委員会による整理・編集後に印刷業者を介さずに公開されるので、図表の画質等を含めて著者らは十分にチェック・確認する。補足資料は以下の指針に従って作成する。
- ・ 各資料は Supplementary Table/Figure/Note/Equations/Methods と命名する。
- ・ Supplementary Table および Supplementary Figure には、「Table S1」 、「Fig. S1」 のような番号をつける。この番号付けは、論文本体の図表に用いる番号とは別とする。
- ・ Supplementary Note または Supplementary Methods には番号を付けず、表題は任意とする。
- ・ 各々の補足資料について、論文本体の然るべき箇所で触れるものとする。
- ・ 補足資料への言及では、毎回必ず「Supplementary」または「Suppl.」の語をつける。

・ 補足資料において引用される文献は、論文本体とは別に補足資料内で文献リストを作成する。
その記載フォーマットは論文本体のものと同様にする。



資料：Supplementary Information（補足資料）の作成/公開のフロー

ROG Vol. 38 の発刊は 2022 年 12 月末に発行する予定です。早ければ、Vol. 38、 No. 1 として WEB 公開を 11 月中には行うことができると思います。コロナ禍やロシアのウクライナ侵攻など世の中の劣勢に負けず研究・執筆活動を進められて、その成果をぜひ ROG へご投稿してください。どうぞよろしくお願いいたします。

現在の ROG の論文のカテゴリーは、1) 論文(article)、2) 短報(short article)、3) 技術論文(technical paper)、4) 総説(review)、5) 議論(discussion)になります。有機地球化学会シンポジウムで発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表なども歓迎いたします。詳細は、学会ホームページの投稿規定改定版（近日公開）をご参照ください。また、上記の枠に入らない論文や企画でも、有機地球化学の発展に貢献し、学会員にとって有意義な論文・企画であれば、随時、編集委員会で検討を進めます。ROG は研究分野・領域の**ボトムアップ**をより重視した性格の雑誌であり、日本の有機地球化学の技術者・研究者が提案する挑戦的・草分け的なアイデアなどを積極的に掲載したいと考えております。積極的に編集委員会にお問い合わせ下さい。その他、いろいろなご意見、ご要望、ご感想をお寄せください。

ご投稿・ご連絡は下記までお願いいたします。

PDF 添付ファイルによる電子投稿： sawadak@sci.hokudai.ac.jp

郵送：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目

北海道大学 大学院理学院 地球惑星科学部門

沢田 健 編集委員長宛

(TEL: 011-706-2733、 FAX: 011-746-0394)

編集後記

5月より研究現場を離れ、地質調査総合センターの研究企画室で1年間働いています。組織運営に携わる部署ですが、組織が社会実装や社会課題解決などに大きく舵を切る中で、基礎研究をどのように守り・推進していくか考える日々です。(金)

コロナによる規制は解除されていく方向にありますね。この2年で色々とオンライン化が進みましたが、アフターコロナではどのようなようになるのでしょうか？(中)

産休・育休中(菅)

発行責任者 日本有機地球化学会会長 奈良岡 浩
〒819-0395 福岡市西区元岡744 (ウエスト1号館A棟5階 W1-A-529)
九州大学 大学院理学研究院地球惑星科学部門
(TEL) 092-802-4216 (FAX) 092-802-4208

一般社団法人日本有機地球化学会 事務局
〒060-0819 北海道札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学 低温科学研究所 同位体物質循環分野
事務局長 力石 嘉人
Phone : 011-706-5472 (直通)
E-mail : office@ogeochem.jp

編集者 金子 雅紀(産業技術総合研究所)、中田 亮一(海洋研究開発機構)、
菅原 春菜(宇宙航空研究開発機構):
e-mail: rog_nl@ogeochem.jp